

# 講師の手引き

個別指導塾フェイス

## 塾生をご指導いただく講師のみなさんへ

### はじめに

当塾は、大学進学を希望する高校生・高卒生を対象とした、個別学習指導の塾です。大手予備校等が行っているような1対多数の授業形式ではなく、講師1人に対し塾生2人を1単位とした、完全個別指導形式になっています。

現在、少子化の進行が社会的な問題になっている一方で、大学・学部の数は増加傾向にあります。どこの大学も学生の確保が至上命題である中、その手段として入試システムは細分化・複雑化されてきています。

そのため、現在の大学入試を突破するためには、「志望校に合わせた効率のよい学習」が必要となっています。1対多数の授業形式は「入試に必要な知識・技術をより多数の塾生に提供する」という面で非常に効率的と言えますが、これはあくまで塾側からの言い分であって、当然のことながら塾生側にとってみれば、「自分」の成績をどう上げるか、苦手をどう克服するか、が最大のテーマです。ひと言で苦手と言っても、その苦手の具体的な中身は個々によってまちまちです。その塾生個々の学習上のニーズに最大限応えるための指導方法が我々の行う「個別学習指導」です。

そのため、当塾にはあらかじめ設定されたカリキュラムやテキストのようなものは存在しません。とは言え、講師個々がバラバラに指導をしていては、塾生のニーズを十分に満たすことは不可能です。

そこで、フェイスの講師として、共通に認識しておいていただきたいことを以下にまとめました。精読のうえ、塾生の希望を叶えるためにもともに尽力していただきたいと思えます。

## 学習指導について

「量より質」とはよく聞かれる言葉ですが、これは学習指導においてもそのまま当てはまりません。自分が理解できない授業(それが内容的にどんなに高尚なものでも)を延々と聞いていても、学力は向上しません。逆に、もうすでにすっかり身につけていること(例えば数学における九九)を延々と繰り返しても、効果があるはずもありません。つまり学習指導における「質」とは、その子にとってちょっと難しい、でも頑張ればなんとか解ける、そのようなレベルの授業を提供することです。この「質」の見極めと提供が講師の最大の仕事になりますが、その具体的な方法論については後の「教科指導法について」で詳述したいと思います。

指導の質をしっかりと保証すれば、学力自体は向上します。しかし、大学入試の根本は「競争」にあります。いくら学力が向上しても、それ以上に周囲の学力が向上すれば競争には敗れてしまいます。この競争に打ち勝つためには、質の保証によって芽生えた学力向上の芽を、太く長くしていかななくてはなりません。そのための栄養となるのが「量」です。

塾の本分は「質」の提供にあります。「質」は自力ではなかなか獲得しづらいものであるため、お金を払う価値がそこに生まれるわけです。しかし、前述したように「量」によって磨かれなくては、その質は光り輝くことができません。とはいえ、限られた授業時間内では質とともに量まで十分に提供することは難しいのも事実です。つまり量の保証は塾生本人に担ってもらわなければなりません。

そのために塾側ができることは「宿題を出す」ことです。しかし、この方法論は小学校時代から塾生たちが味わってきているものですから、ただ出しただけではなかなか効果は得られません。そこで、宿題を出す際の留意点をいくつか挙げておきます。

### ☆できない宿題は出さない

既述したように、宿題を出すという方法論は量を保証するためのものです。つまり基本的には「復習」の分野に属するもので、それによって新しい知識を塾生に身につけさせるものではありません。当然、まだ習得していないものを宿題として出されても、塾生としてはやる気をなくすだけです。「やれば必ずできるもの」を宿題として出すようにしましょう。

### ☆宿題の意図を塾生に伝える

人間だれしも、意味のないことはやりたがらないものです。まして、他人から強制された意味のないことなどは言うまでもありません。

「今日授業でやったこのことは、入試でも絶対必要なことだから、これを完璧に身につけるためにこの宿題をやってきてね」

「次回やることは、今日やったことが基になるから、この宿題で完璧にしておいてね」

など、ひと言理由を添えてあげれば、宿題が「やらされる」ものから「やろう」と思えるものになるでしょう。

### ☆必ず宿題のチェックを

褒められるために塾生は宿題をやってくるわけではありませんが、やはり努力したことを認められないと虚しくなるものです。必ず授業の冒頭に何らかの形で宿題をやったかどうかをチェックしましょう。また、宿題をしっかりとやってきたにも関わらず、まだしっかりと内容が定着していないようであれば、それはその塾生にとって非常に理解しにくい、弱点の分野であると考えられます。ならば、その分野をもう少し時間をかけて指導するなど、宿題は授業方針の修正材料にもなります。

大学入試で必要とされる知識は多く、特に現役生などは、学校で一通りの学習が終わらないうちに受験、ということもままあります。入試必要事項を十分に身につけるために量をこなそうと思ったら、やはり学校や塾以外での「自分の時間」を学習にあてる必要があります。この時、いまどのような勉強をすればいいのかを的確に判断し実行する力が「自力学習力」です。この自力学習のための第一歩が宿題になります。宿題をやることを通して学習の方法を学び、自分の学習上の課題を把握できる能力が身につけていきます。

そしてこの自力学習力は、なにも大学受験に限って必要なことではありません。塾生が今後、自分の人生の様々な場面において学び、成長していくための基本的な能力となります。講師は決して勉強を教えていればいいわけではありません。塾生の人生の一部にかかわっているのです。そして、逆もまた真です。塾生と真剣に向き合うことで、我々講師も人間として大きく成長できるのです。

講師自身も常に成長できるような塾でありたいと願っています。

## 教科指導法について

「はじめに」で触れたように、個々の塾生の学習上のニーズに最大限応えるのが当塾の使命です。そのためには、通り一遍の授業ではそのニーズに応えることはできません。塾生の現状の学力、課題を正確に判断することがニーズに応えるための第一条件ですが、

「どのような説明の仕方がこの子にとって最もわかりやすいのか」

「この子にとって最良な授業とはどのようなものか」

これらのことを理解するには、その子の性格やこれまでの学習の仕方など、多面的な視点が必要になります。もちろんそれらは一朝一夕に身につくものではなく、絶えず試行錯誤を繰り返していかなくてはなりません。

以下に、私がこれまでの数学指導から得た、「この子のための授業」をする上でのヒントを列挙します。教科によって異なる面もあるかと思いますが、参考にして下さい。

### ☆「覚えた」ものより「理解した」ものの方が頭に残る

暗記は学習の一面ではありますが、それだけでは本当の知識とは言えません。知識とは、自分で使いこなせるようになって初めて意味あるものになるのです。人間の脳は単発的なことがらはずぐ記憶から消去してしまいますが、他の様々なことがらと結びついているものは消去されにくく、ちょっとしたきっかけですぐに思い出すことができます（語呂合わせがいい例です）。「理解する」とは、ものごとともものごとのつながりやその背景などを含めて頭に入れることですから、記憶から消去されにくいわけです。また、単発的に覚えたことがらは知識として単体としてでしか存在しませんが、理解したことがらは様々なことがらとつながっているため、応用が利きます。冒頭に述べた「知識を使いこなせるようになる」とは、応用が利くかどうかということです。

### ☆ノートを見れば学習のスタイルがわかる

ノートは自分の思考過程を表現するものです。したがってノートを見れば、その子がどのような思考過程を経て答えに辿り着いたのか、さらには普段どのようなスタイルで学習に臨んでいるのかが推測できます。そこに指導のヒントがあります。以下に、数学を例にいくつかのノートパターンを挙げてみます。

### ○数式と計算しか書かれていない

計算ができることと数学ができることがイコールであるのはせいぜい中学校までです。高校数学では、計算は答えを求めるための仕上げの段階でしかなく、立式をすることがメインの作業になってきます。数式と計算しか書かれていないということは、「なぜこのような式になるのか」「なぜここでこの公式を使うのか」という立式の根拠を意識していないということです。また、このようなノートでは、答えが間違っていたときに、自分の考えのどこに誤りがあったのかを振り返ることができず、問題や解答に対する理解が不十分になり、同じ間違いを繰り返してしまうこととなります。式の意味や、計算の結果出てきた値が何を表しているのかなどといった、答え以外の部分を重視した指導をしていかななくてはなりません。

### ○ノートにぎっしりと詰め込んで書いている

大学入試レベルの問題になると、1つの公式や計算で答えまでたどり着けるような問題は稀です。様々な角度から問題を捉え、多様な公式や計算を駆使し、それぞれの計算で得られた値を照らし合わせて最終的な答えを導き出す必要があります。ノートに余白がないということは、それらの段階が意識できていない可能性が高いです。そうすると、先へ進むにつれて思考がこんがらがってしまい、途中で振り返ろうにも振り返るポイントがわからず、最終的に一からやり直すか、諦めて投げ出すといった結果になります。そのようなことにならないように、しっかりと段階ごとに計算を整理しながら、ノートを上手に使うことで問題を解いていくことを指導していく必要があります。

### ○やたらと色ペンや定規を使っている

ノートをきれいに見やすくまとめようとするのは学習の態度としては褒められることですが、ひとつ間違えればそこに執着して、問題への理解が不十分のまま終わってしまうことになりかねません。またこのようなノートのタイプは、1つの計算にも丁寧すぎるほどに取り組み、1問を解くのに多くの時間を割いてしまいがちです。言うまでもなくテストや入試には時間制限がある上、多くの数学の試験ではものさしなどの補助具は使用禁止となっています。正確さ・丁寧さと、効率の良さをバランスよく身に付けられるように指導する必要があります。

### ☆間違えたときこそ伸ばすチャンス

問題を解く上で、塾生は多くの間違いを犯します。それを1つ1つ指摘し、正しい解法を教えることはもちろん大切ですが、たとえ間違った解答であっても、それは塾生が自分なりに理屈を立てて導き出したものなのです。塾生に限らず、自分の考えを真っ向から否定されて気分がいい人はいらざるがありません。なぜそう考えたのかをしっかりと聞き出し、その考えの正しい部分はしっかりと認めた上で、どこに誤りがあったのかを指摘していかなくては塾生は納得できませんし、また同じ間違いを繰り返すこととなります。自分がなぜ間違えたのか、何が正しいのかを納得できたときに、「わかった」「できた」こととなります。誤答こそ、学力を高める最大のチャンスなのです。

### ☆黙って見守るのも指導

近年のセンター試験をはじめとした大学入試では、覚えた知識の量より、それを基にした思考力を問うような出題傾向になってきています。思考力は一朝一夕に身につくものではありませんが、まず自分の頭で考えるという姿勢がなければ永遠に身につけません。授業の中で、塾生が間違えた瞬間にストップをかけると、塾生の思考はそこで中断されてしまい、思考力を育てるせっかくの機会を講師が奪ってしまうことになりかねないのです。解答が間違っていようと道を外れていようと、塾生が自分なりに考え、解き進めているうちは、黙って見守るのも立派な指導のうちです。助けを求めてきたり、思考が混乱して一向に進まなかったりするようであれば、そのときこそ講師の出番なのです。

### ☆「なんでわからないの？」は講師の責任

塾生はわからないことがあるから塾に通っているのです。質問を受けたときに「なんでこんなことがわからないの?」と言って詰問すると、塾生は萎縮してしまい、二度と質問できなくなってしまいます。そうすると、当塾の最大の特徴である個別学習指導の意味がなくなってしまいます。また「前も説明したでしょ」というような言葉も、自身の指導力の無さを自覚していない言葉です。前の説明のしかたでは塾生が納得できていない、ならば別の方法で説明をする必要があると考えるのがあるべき講師の姿勢です。どのようなことであれ、質問することは塾生の当然の権利であり、塾生が納得するまで言葉を尽くして説明することが講師の義務です。塾生の努力不足を言い訳にする前に、もう一度自分の指導に謙虚に向き合い、常により良い指導を求めていかなくてはなりません。

## ☆信頼関係を築くのが指導の前提

個別学習指導を行う上で欠かせないのは、講師と塾生の信頼関係です。塾生から信頼されていなければ、どんなに言葉を尽くして説明したとしても、その言葉は塾生の頭には残りません。信頼関係を築くための第一歩は、塾生のために一生懸命になることです。わからない問題があれば、一方的に教えるだけでなく、共に悩み、考え、解けた時の喜びを共有する。学習面以外でも、趣味の話や学校の話、たまには愚痴なども聞いてみたりする。そのようにして講師と塾生の関係が密になり、信頼関係が結ばれてくるのです。ただ勉強を教えるだけじゃない、目標に向かって共に歩んでくれる講師を塾生は望んでいます。

これらの指導における技術等は、ごく一部でしかありません。再三述べている通り、塾生一人ひとりに対して柔軟に、適切に指導法を適応させていく必要があります。また、様々なタイプの講師が在籍していることが、塾としての指導の厚みを生み出します。必要最低限の共通理解の下、それぞれの講師が自分の特徴を生かした指導を展開してくれることを願っています。

## おわりに

夏休みや春休みになると、大学に進学した多くの元塾生たちが、当塾で出会った友達と一緒に尋ねてきてくれます。少人数の指導で、共に学ぶ喜び・苦しみを分かち合った同志だからこそ、席を同じくするだけの大規模な予備校とは違う絆が生まれます。

その絆の中心にいるのが我々です。

当塾は大学進学を希望する高校生・高卒生を対象とした学習塾ではありますが、決して学習指導のみを目的とした塾ではありません。

自ら目標を設定し、それに向かって前進する力。

異なる学校や学年・年齢の人と主体的に関われる力。

学び、それを活かし、自分の人生を自分で形作ることのできる力。

塾生には様々な「人間としての力」を身に付けてほしいと願っています。それと同時に講師のみなさんにも、人生で最も多感な時期である高校生と関わる責任の重さと、だからこそ味わえる喜びを噛みしめて塾生と接して行ってほしいと思います。

もし迷ったり、わからないことがあったりすれば、いつでも気軽に相談に来てください。当塾での仕事を通して、講師のみなさんが自らの人生において有意な経験を積まれることを願っています。

個別学習塾フェイス  
塾長 胤森 勇人